

体験・食育重視の子育て・ 就労支援事業の展開



— 農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一 —

筆者の自宅のすぐ近くに孫が住み、徒歩で4、5分ほどの最寄りにある「武蔵野どろんこ保育園」に通園している。

この保育園と筆者との出会いは6年ほど前。孫が生まれる前の話で、筆者が役員をしている自治会で、会員から近所の保育園で鶏を飼い始め、その鶏が朝に鳴く声がやかましいとの苦情が寄せられたことによる。鶏の鳴き声をやかましいと感じる会員がいても不思議はないとはいえ、むしろ時を告げるその声が昔懐かしく、ほっとした気分にしてくれるだけでなく、何より園児らが鶏に触れる体験の重要性について理解してほしいところだ。

こうした会員の声をまともに取り上げる気は筆者には全くなかったものの、声があることだけはお伝えしておこうということで、園長に面会した。園長の話では、どろんこ保育園は各地にあり、同様の苦情から、おんどりを入れずにめんどりだけにするなどの対策を講じている園もあり、本部と相談してみたいとのことであった。せっかくの機会でもあり、どろんこ保育園の概要について園長にお聞きして、びっくりした。

1998年に創業、(株)ゴーエスト、(株)日本福祉総合研究所、社会福祉法人どろんこ会、(株)南魚沼生産組合、(株)Doronko Agriで、どろんこ会グループを作って運営している。「2023年8月1日版どろんこ会グループ施設一覧」によれば、全国で認可保育園が85（開設準備中を含む）、自治体認証保育園、企業内・事業所内保育園、院内保育所を含めると111。これに、地域子育て支援センターちきんえっく、学童保育室、病後児保育室、児童発達支援事業所、障害児相談支援事業所、保育所等訪問支援事業所、放課後等デイサービス、児童発達支援センター、さらに就労継続支援B型事業所も加えて、177の事業所等を有する。「真に壁のないインクルーシブ保育への挑戦」を大きな課題にしている。

基本理念は「子育てから世界は変わる」「背中で、教える。経験して、知る」のようだ。2022年度の年次報告を読むと、「全ての人が『生きる力』をもって、よく生きられる社会のために、人も食も仕事も循環する事業活動を行っています」と強調されている。活動の全貌を紹介することはかなわないが、食・農に関係する特記事項を挙げておくと、第一に、給食用のコメは南魚沼生産組合が減農薬で生産して100%自給を実現。第二に、第一を踏まえて給食で使う野菜の自給率を高めていくため関東圏で農業に着手。第三に、グループ初の就労

支援事業として、23年7月に東京都西東京市に就労支援つむぎ武蔵野ルームを開所し、つむぎC A F E 武蔵野をオープンするとともに、施設隣地の栗畑での農作業ともリンクさせている。

3歳半を過ぎた孫は、毎日のように小金井公園などに散歩に出掛けている。また、園から道路を隔てた畑で、種まきしたり、収穫したり。給食は自分で配膳している。体験を積み重ねながら大きくなっているのがうれしい。そして、子育て・就労支援事業で地域と日本を良くしていくと挑戦を続けるオーナーと職員集団に、エールを送りたい。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入庫、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕

「生産消費者が農をひらく」「未来を耕す農的社会」「農的社会をひらく」「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上、創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など



昼食時間帯の、つむぎC A F E 武蔵野